

あの戦争を語り継ぐ
平和都市宣言
30周年記念連載⑧

宮崎幸子さん 82歳

根地区在住

ハルピンでの終戦と 引き揚げ

私は満州（現在の中国東北地方）の撫順で生まれ、ハルピンで育ちました。花園在満国民学校の小学5年生の時に終戦を迎えました。

当時のハルピンはとてもきれいな街で、駐在の日本人や白系ロシア人もたくさんおり、幸せな日々をすごしていましたが、終戦と同時に一転しました。日本人は外出しない方がいいと言われ、集団自決用の火薬が各家

庭に配られたそうです。

静まり返った住宅街にソ連兵が叫びながら、自動小銃を持って強盗に来るようになり、私たちは助けを求める所もなく、おびえて過ごす毎日でした。最初に入ってきたソ連兵は、刑務所上がりでたちが悪いこのうわさがあり、本当に怖かったです。

満鉄管理局に在職していた父は、終戦後社内の会議中に戦犯として突如ソ連兵に連行されました。元部下の中国人駅長が機転を利かせて助けてくださり、1カ月後に瘦せかけて戻ってきました。無政府状態での不安な生活も1年がすぎ、待望の引き揚げが始まりました。8月末の暑い時期、リュック一つで無蓋貨車に乗ったり、歩いたりして野宿しながら乗船地の

「コロ島（中国遼寧省）にたどり着きました。私たちは無事に到着しましたが、強盗に遭ったりした人たちもいたそうです。

港で迎えてくれた日本の船員に、皆よろこびの声があげられました。日本に向かう船に乗ることができ、「もう大丈夫ね」と言った親の「ことば」。あの表情を今でも思い出します。感涙していました。足手まといの私たち子どもを守り連れて帰ってくれて、「アリガトウ」と感謝したいのにすでに親たちはおりません。今でも時々手をあわせて「アリガトウ」と言っています。

■ 企画政策課男女共同参画室内線3354

※体験談を募集しています。